

特集  
京都  
古都の美とまちづくり

Special Features  
Kyoto  
Beauty and Renovation of the Traditional City

近代の暮らしにみる古都のまちづくり  
Town Renovation in Lives of Recent Years

## 京の水文化とまちづくり

水をめぐらす歴史から

嘉田由紀子

KADA Yukiko

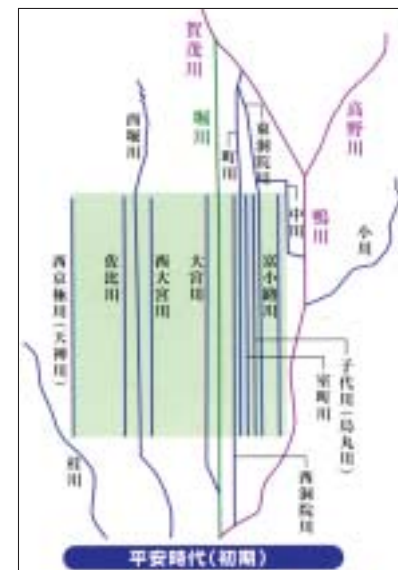
京都精華大学教授/琵琶湖博物館/  
子どもと川とまちのフォーラム/水と文化研究会



### 1—水をめぐらす文化

京に都がおかれた延暦13年(794年)の平安遷都の詔には、「此国は山河襟帯にして、自然に城をなす」とある。衣服の襟のように、平安京は山に囲まれ、川が帯のように流れているさまを凝縮した表現といえる。文化人類学の米山俊直は、「小盆地文化論」という表現で、周囲の山やまを集水域とする盆地には、日本人の住まい方のモデルがあるという。そして、日本中には100あまりの小盆地文化地域がみられるともいう(米山、1989)。

盆地とは、英語でいえばまさに「Basin」であり、流域である。京都がなぜ1200年もの間、政治や文化の中心として、また人びとの暮らしの場として維持されてきたのか。さまざまな解釈が可能であろうが、そのひとつの要因に、必要に応じて水をとりこみ、不要時には流し去るという「水をめぐらす」文化がそれぞれの時代の要求を受け入れながら、息づいてきたことが一因であろうと、私は考えている。人間社会は、生活や生産に必要な水量と水質を確保す



■図1—平安時代の河川と市街地  
出典：水鏡 17頁、京都市建設局

る必要があるだけでなく、日本のような大雨地帯では、過剰な水を流し去る仕組みも必須である。同時に、都市生活は必然的に人間の身体や暮らしに取り入れる物質(衣食住)の供給とあわせて、人間身体からでる廃棄物への配慮も必要である。多くの都市では、人間生存にかかわるモノをめぐらす役割も、水が担ってきた。このエッセイでは、京都の「水をめぐらす文化」をふりかえりながら、これからの京都の水文化の方向をあわせて考えてみたい。

### 2—平安時代から室町時代の計画河川—京都風水文化の起源—

平安京造営前、京都には東に鴨川、西に桂川の2大川と、その間を北東から南西に流れる小川がたくさんあったが、平安京造営に伴う碁盤の目状の道路計画にあわせて、12本の河川が南北に掘られた(図1)。西京極川、西堀川、大宮川、堀川、西洞院川、東洞院川などである。水量の多い堀川には鮎などの魚類も生息していたというが、多くの河川は市街地中心部を流れ、現在でいう中水道の役割を果たし、洗い物などに使われ



■写真1—元本能寺跡から出土した平安時代から江戸時代にかけての井戸跡(2003年1月 京都市中京区 撮影筆者)

ることに由来しているというが、疫病は今でいう生物的汚染であり、その元は人間のし尿の不完全な管理にあったといえるだろう。

それゆえ、飲料水や料理の水など、人びとが直接口にに入れる水としてあてにできたのは井戸による地下水であった。幸い、山河襟帯の京都周辺には東山、北山、西山があり、これらの山やまからは、河川水だけでなく安定した地下水が供給された。冬には雪も多かった山やまは水源としても貴重なものであり、季節を問わず、安定した地下水が確保できた。近年の遺跡の発掘によると、町家や屋敷跡には平安時代から各時代毎に、無数の井戸跡が出土することがあるが、全体的にみると、ほとんどの井戸の深さが2-3メートルしかなく、地下水位が高かったことを示しているといえる。

また平安時代から、水の多寡を司ることを祈り、水の神を祭る文化も生まれた。鴨川の水源地である貴船神社のご祭神は、オカミとよばれる水の神で、闇オカミ(地下水の神)、高オカミ(森の水源地)の区別もされていた。さらに平安時代、朝廷は、日照りの時には黒馬、大雨の時には白馬か赤馬を貴船神社に奉納・祈願をしたとされる。水を求めながら、同時に大雨を流し去る、水をめぐらす文化である。今でも毎年3月9日には、雨乞い祈願が貴船神社で行われている。全国には今、500社あまりの貴船神社が祭られているが、京都の貴船神社がその本社といえる。

都の中心には、平安京造営時に、かつて湿地帯であったところに神泉苑が掘られ、ここには「善女竜王」という金色の竜で雨を降らせる能力をもっているという水神が弘法大使によって勧請され、今も雨乞いの場所として信仰されている。神泉苑は、江戸時代に二条城が築城されたときに、規模は縮小された。しかし、今も神泉苑は健在で、御池通りの由来ともなっている。

### 3—江戸時代から明治初期—成熟した水をめぐらす文化

京都の水文化が成熟した姿を示すのは、江戸時代である。図2には江戸期の河川図を示してあるが、応仁の乱により荒廃した都を立て直すために、豊臣秀吉は天正19年(1591年)に京都の周囲に「御土居」(図2の赤線)を築き、外からの侵略を防ぐと同時に、度重なる洪水から京都市街の暮らしを守ろうとした。室町時代、白河天皇の嘆きで知られる「賀茂の水、双六の目、山法師」というように、鴨川の氾濫による被害は甚大だった。

一方、京の西側には桂川が流れ、ここも洪水常習の川

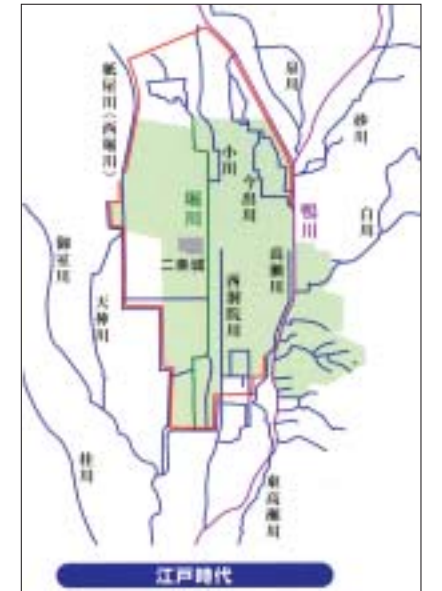
だった。平安時代以降、鴨川や桂川は数年に1回ほど氾濫するあばれ川でもあった。秀吉はこの水害を防ぐと同時に、鴨川の大改修を進め、寺町通りに寺を集め、その東側に御土居を築き、物的、精神的に、鴨川の洪水から人びとの暮らしを守ろうとした。

本能寺など、有名な寺社も寺町通りに集められた。御土居は、西側の桂川の洪水を防ぐ役割もはたした。

江戸時代の京都の川を考えるのに忘れられないのは高瀬川の開削である。森鷗外の小説で有名な高瀬川は、角倉了以によって掘られ、木屋町二条から鴨川に沿う輸送を目的とした人工河川である。これにより京都と大阪が淀川経由の舟運で結びつくことになった。高瀬舟により運ばれた物質には、京都の町の暮らしに必要な木材や薪炭、米などがある。では、京都から運び出されたものは何であろうか。今の高瀬川の風流なイメージと異なるであろうが、京都の町からは、し尿を下流の伏見や淀川沿岸の村に運ぶのにも活用された。京都の町の衛生状態を保つのに、し尿の運びだしは大変重要な意味をもっていた。しかもし尿は有価物として、下流の伏見、宇治などの農業生産の肥料として使われた。京都の山崎達雄の研究によると、天保時代の京都のし尿は、現在価格で4億円ほどの価値があった、という(山崎、1999年)。

さらに、桂川から木材や米を市の中心部に運ぶために開削された人工河川がある。二条城近くまで、西から東に流れ、そのあと南へ流れる西高瀬川(堀子川)である。江戸時代末期、文久3年(1863年)、西高瀬川ができたことにより、材木問屋が千本丸太町あたりに生まれた。

飲み水については、滝沢馬琴が「京に良きもの三つ、女子、加茂の水、社寺」と述べているように、水の良い都市としても知られ、京都風の味つけのうすい食文化をつくりだした。豆腐、湯葉、麩、和菓子などは、よい水なくしてなりたない文化である。盆地であるがゆえの地下水の水量と水質のおかげである。



■図2—江戸時代の京都の河川と市街地  
出典：水鏡 17頁、京都市建設局



酒造りは、平安時代から京都で始まっているが、江戸初期の寛文年間には、1000軒以上の酒づくりの酒蔵があったといわれ、特に地下水が豊富な千本通り沿いなどに酒蔵が立ち並んでいた。裏千家などの三千家がある小川や堀川沿いには梅の井、醒ヶ井などの名水が多くある。

このように江戸時代には、地域の「近い水」に依存する文化を活用しながら、水そのものだけでなく、都市生活の静脈といえるし尿などを運びだすためにも、京の水路網は役割を果たしていたといえる。めぐらす水の文化が健在であった。

#### 4—琵琶湖疏水の開削と近代化の中の京都—使い捨て思想の蔓延—

明治維新後、天皇が東京へ移ったあと、京都の町は活力を失いつつあった。そこに計画されたのが琵琶湖疏水であった。琵琶湖と大阪を結ぶ舟運の開削や電力開発による産業振興をねらいに明治23年に第1疏水が完成し、日本で最初の市電を走らせた。その後、さらなる電力の需要増や水道化の要望の中で、明治45年に第

2疏水が開削され、毎秒23トンあまりの水が琵琶湖から京都市内に導水されることになった。

琵琶湖疏水は発電や舟運に使われるだけでなく、京都市内には、北へ流れる新たな水路が開かれ、銀閣寺前の有名な哲学の道や、岡崎公園周囲の水路も琵琶湖疏水の関連水路である。さらに御所や本願寺などの大きな寺などにも疏水の水はひかれ、京都市内に降る雨に匹敵するほどの水を常時引き込むことになり、このあと、京都は渇水や水不足を経験することなく、近代社会をむかえた。

しかし、疏水の開削は、逆に、京都の人たちに、目の前の地下水や、河川水への関心を弱めるという逆効果ももたらしたといえるだろう。蛇口の水さえ豊富で安心であったらという意識が日常的となり、よほどの専門家でない限り水のことに拘泥しなくなった。

と同時に、昭和初期には、下水と雨水を排除するために、思想的にはヨーロッパ起源の下水道が整備されはじめ、雨水などが地下にもぐり、人びとの目から見えなくなってきた。あわせて、明治大正時代には市電が、そ

して戦後は自動車交通の要求から、市内を流れる川は邪魔者とされ、今出川や西洞院川は完全に埋められて、地下にもぐってしまった。また堀川や、西高瀬川など、かろうじて流路が残された河川も、周辺の都市化の中で、川幅を狭められ、洪水時の水をできるだけ早く流し去るという目的で、コンクリート壁の深く掘り込んだカミソリ護岸の都市下水路と化してしまった。

このようにして、使う水は上流からもらい、不要な水は下流に流し、し尿は不要物となり、下水道で下流に流されるようになった。ある意味、ここに「水の使い捨てシステム」ができたことになる。

今、かろうじて、京都市民や観光客が水を感じることができる場合は、鴨川と、高瀬川、白川など、大変限られた場所しかない。しかし、京の歴史、京の食文化、京の風土を考える時に「めぐる水」とのかかわりを失うことは大変な文化破壊になる。

#### 5—これからの京の水文化—見えなくなった水を取り戻す市民・住民の動き

京都には、昭和40年代から、鴨川などを中心とした河川愛護団体が活躍してきた。1990年代には、地域を流れる身近な河川への関心も高まっていった。いったん離れてしまった人びとの意識を川につなぎとめようという流れであり、堀川や、有栖川などが典型といえる。ゴミ汚染などを防ぎたいという思いだけでなく、自分たちの地域の誇りを取り戻そうという思いをもつ住民が、川への関心を高め、大人だけでなく、子どもたちをもまきこんだ活動に成長してきた。

2003年に第3回世界水フォーラムが京都・滋賀・大阪で開催されたことをきっかけに、市民や住民の水への関心はより高まった。その中に、地下水やわき水など、「見えなくなった京の水を見えるようにしよう」という活動がある。大人が中心の「世界水フォーラム市民ネット」や、子どもたちといっしょに水を考えようという「世界子ども水フォーラム・京都」など、さまざまな人たちが動き始めた。

その中で、私たちが具体的にかかわってきた「世界子ども水フォーラム・京都」(その後名称を「子どもと川とまちのフォーラム」とかえた)の活動を紹介します。今の子どもたちにとって、「蛇口をひねると水がでる」という「近い水」に依存する生活様式はあたり前であり、あえて、水道以前にはどんな暮らしがあったのか、問いを發するチャンスはほとんどない。また世界各地で、電気もガスも水道もなく、子どもが水くみをしないと家族生活がなりたたない世界があることなどほとんど想像できない。

そんな中で、今の自分たちの生活様式と異なる暮らしについて学び考える「もしも蛇口がなかったら？」プロジェクトとして活動を開始した。ひとつの方向は、アジア、アフリカなど水道のない地域の暮らしについて、その問題を共有し、皆で考えようというものである。もうひとつの方向は、日本で、水道がなかった時代の井戸水や地下

水、河川などの利用の仕方や文化などを学び考えることである。

2003年3月の水フォーラムの時には、アフリカ、マラウイから来た同世代の子どもから、バケツでの水運びの仕方を教わり、「水って重たい!」と子どもたちは水の実感をとらえることができた。また2003年7月には、洪水被害をうけたチェコを、12月には水道も電気もないカンボジア・トンレサップ湖を子どもたちと訪問した。

京都でも「近い水」を生かして暮らしをしている人たちがいる。そこで、和菓子屋さん、生麩屋さんなど訪問し、井戸水の使い方などを学んだ。また町歩きの中で、昔の地下水探しなども行った。

子どもたちが歩いて発見した水物語も含めて、2004年1月、京都の市民グループ、カップ研究会は、「京の水物語マップ」を作成した。ここには、京都の水と人びとのかかわりの物語が多くおさめられているが、実は、水との物語は、ひとりひとりがこれからつくりだしていく、未来へのベクトルをもつものである。

特に、今、1200年以上の歴史をもつ、京都の水をめぐらす知恵は、下水道と上水道という工学的な技術と、行政管理により、地理的、社会的、そして心理的に「遠い水」となっている。これらを、自らが水をめぐらし、都市のモノをめぐらす「近い水」にいかにかえていくのか、今、京都の市民や住民の知恵が試されているといえるだろう。その未来を子どもたちの発想に託したい。

〈参考文献〉  
 1) 米山俊直「小盆地文化論」岩波書店、1989年  
 2) 世界水フォーラム市民ネット編「もっと知りたい京都水の都」人文書院、2003年  
 3) 植田劭・嘉田由紀子編「水と暮らしの環境文化—京都から世界へつなぐ」昭和堂、2003年  
 4) ミツカン水の文化センター編「水の文化 京の謎」ミツカン水の文化センター発行、2003年  
 5) 子どもと川とまちのフォーラム編「水を学ぼう 子ども車座会議II 子どもと川とまちのフォーラム発行、2004年  
 6) カップ研究会編「京の水物語マップ」カップ研究会発行、2004年  
 7) 山崎達雄「洛中慶捨場今昔」臨川書店、1999年



■図3—大正時代の京都の河川と市街地  
 出典：水鏡 17頁、京都市建設局



■写真2—高瀬川も貴重な見える流れだ  
 (2004年1月 撮影筆者)



■写真3—祇園の真ん中を流れる白川(2004年1月 撮影筆者)



■写真4—名水、醒ヶ井にちなんでつくられている和菓子  
 (2004年1月 撮影筆者)



■写真5—京町家で井戸水めっけ! 子どもと川とまちのフォーラムの子どもたち(2003年11月 撮影筆者)



■写真6—小野小町が化粧に使ったという化粧水も今は石柱しかない子どもと川とまちのフォーラムの子どもたち(2003年11月 撮影筆者)



■写真7—市民グループがつくった水物語マップ